

空



2011・10

SORA 39号

月光

柴田 佐知子

逆さまに虫籠掴む虫の貌

風入れて部屋青くなる盆の入り

泣く前の子の眼動かず草の花

見てゐたる露にしばらく籠りけり

母のこと聞かれてばかり地藏盆

みのこづち腹の立つほど付いてゐる

黍の穂や辺境に血の征服史

月光のとどく限りをこの世とも

耳遠き父を遥かに山笠やま走る

—「俳句研究」秋の号より—

三伏や怒濤に勝る蟹の声



山割つて男出てくる日の盛り

秋めくや通路といふは素気なし

海鳴りにまみるる棚田刈りにけり

大花野起伏の伏はすでに闇

墓石が返す山の日鷲渡る

父寄せて敷布を替ふる秋の昼

南無三宝撫で肩の墓穴に入る

秋風や一の社は焼けしまま

落人の逃れきつたる紅葉谷

鍋釜も化けて出さうな月夜かな

解かれたる案山子即ち棒二本

星月夜支へて父を起たしむる

秋の声

高倉和子

遠泳の空を目指してゐるごとし
父ははにいつもの朝や終戦日
芋の露落ちて大地の湿りたる
旧道の瀬音はげしき赤蜻蛉
梁太き家の暗さや昼の虫
大木に凭れてをれば秋の声
台風の過ぎたる空の広さかな
墓までの小さき道や猫じやらし
連山の裾野明るき九月かな
日かげりて色の落ち着く曼珠沙華



芋虫

中田みなみ

飽食の街の灯眺むる夏の風邪
考へることをやめやうところてん
花火師の黒衣かたまる船の上
鉢咲きの紫蘇に佃の通り雨
朝顔や乾けば白きズック靴
秋晴れや窓拭きて知る身の縮み
生甲斐の茗荷配りに行きしまま
戸に挟む伝言白し夕ちちろ
秋愁や注ぎて切子の酒青く
ありありと魚影の過ぐる秋の月



後ろ手

荒井千佐代

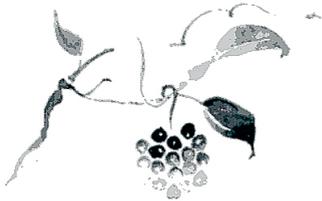
朝よりの灘のべた凧梅を干す
唾唾ああと鴉が虹をくぐり来る
昼顔へ木の枝よりの魚籠しづく
書き込みの多き楽譜を曝したる
水中の余りなきほど水中花
原爆忌ルルドの水の生温し
夕空のまだ真青なり月見草
後ろ手に落暉見てをる囚番
爽やかやドロもコルベも丸眼鏡
石段の天辺に掛け黙の潮



雲ゆくや

雲ゆくや旅の汗疹の消え残り
火の玉のふると育つ線香花火
星涼しテントの中の灯を暗く
バンガロー木の階段を柵にして
川下りまでの間を待つ氷水
炎天にかかる鉄橋川遊び
桑の実や合図の旗に来る渡し
へぼ胡瓜板東太郎裏にあり
校庭の高鳴く孔雀盆帰省
兜虫トムの一生絵日記に

服部早苗



案山子

裏山の風吹き入るる夏座敷

夏草に首まで溺れ道の神

整然といま出陣の蟻の列

箱庭に鎮台さんのゐて故郷

羽抜鶏とさかの色のやや褪せて

雲はもう秋ですと言ふ君が居て

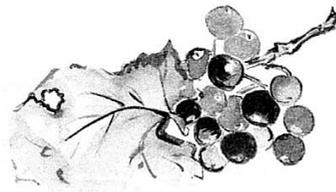
鯖雲やむかし東京遠かりき

戦鬪帽かむり貌なき案山子かな

秋風やハム工場の獣魂碑

口髭の父の庭下駄小鳥来る

柴田志津子



板の間

だいじみどり

日めくりのけふは立秋さうなのか

網戸開け放つあとさき考へず

片蔭にかがむのはあの嫌な奴

クーラーのリモコン握つたまま昼寝

田を植ゑて村で二番目の広さ

ほどほどの力を使ふ水の番

弱り目を横目にビール飲んでをり

夜の秋ちひさく破り捨つるもの

こほろぎの鳴くゆゑ板の間を磨く

素泊りの古き簾や奈良も奥



浮輪の中
秋
千
晴
百
畳
宮井
知英

潮干狩バケツの底に藻の付きし

芍薬や芯の強きは母譲り

朝採りの収穫物に蚊の混じる

百畳に山気満ちたる涼しさよ

飛魚も浮輪の中も日本海

ソーダ水別れ話は手短に

蝸牛殻回しつつ向き変へし

氷挽く音や小路に灯の点り

夕立に打たれて鳥の上下する

産土の杜の荒びや蝉しぐれ

螳螂の三角貌をかしげたり

婿取りの話湧きたり衣文竹

庭に来る猫追ひ払ふ残暑かな

人工衛星飛び交ふ八月十五日

朝顔の空より青く開きたり

鍬先で畦に押しやる穴まどひ

鶺舟

松田明子

大花野

あさなが捷

たいまつの火の粉の舞ひて鶺飼舟

十二羽を鶺舟軋ませ操れり

目隠しを被せ真昼の鶺籠かな

早朝の田に田植機の参上す

嫌はれしまま焼かれたる毛虫かな

担ぎ来し笹を流して川祓

新涼や竿一本の川下り

幽霊凶吊して寺のお風入れ

萍や男泣くなと育てられ

身を清め海女ゆつくりと沈みゆく

島の猫人なつくくて小春かな

深海の怪魚揚がりし二日月

急ぎ来てたちまち帰る盆の僧

大花野天井絵まで広がりぬ

呼びかけしところ膨らむ踊の輪

秋まつり馬が行列したがへて